令和４年度　第２回宇治市早期療育ネットワーク会議　会議録（要旨）

Ⅰ　会議の概要

１　件名　　令和４年度第２回宇治市早期療育ネットワーク会議

２　日時　　令和４年８月 19 日（金）14 時 30 分～16 時 30 分

３　場所　　うじ安心館　３階　ホール

４　出席者

委員　　服部委員長（京都府立大学）　　尾上委員（宇治福祉園）
亀口委員（NPO法人アジール舎）　　荒田委員（あゆみ園）
中西委員（こども発達支援センター）　　大隅委員（宇治児童相談所）
岡野委員（学校教育課）　　川崎委員（こども福祉課）
須原委員（保育支援課）

事務局　福井（福祉こども部長）　柏木（福祉こども部副部長）
栗田（保健推進課長）　平（保健推進課副課長）
発達支援係（神﨑、細川、春田、小倉、岡）

５　欠席　　小山委員（宇治久世医師会小児科医師）
大野委員（かおり之園）
金井委員（山城北保健所）
山下委員（障害福祉課）

６　傍聴　　２名（一般　１名、報道関係１名）

７　議事　（１）今年度の計画について
（２）来年度の取り組みについて
（３）その他

Ⅱ　会議結果・議事要旨

事務局より会議の成立、会議の公開について確認した。

（1）　今年度の計画について

事務局より、資料１にそって報告した。

＜質疑応答＞

委　員：研究会議のテーマとして登園しぶりが挙がっているが、どういった経緯でこのテーマとなったのか。

事務局：昨年度の本会議の中で登園しぶりのケースが話題に挙がっていたので、今回の事例検討のテーマに設定させていただいた。

委　員：年長時に園に通いにくい姿が見られるケースが続いていたので、昨年度話題に出させていただいた。園に行きにくくなるのはなぜなのか、どういう支援をするか、学校への接続をどうするか、など悩むことがあり、ほかの園ではどのようにされているか聞きたかった。

委　員：登園しぶりが生じる背景は様々かと思うが、園に行きにくいだけでなく、療育にも来ない、という場合もある。登園しにくい姿がある場合に、そのことを心配される保護者もいれば、さほど気にされない場合もある。大変、幅の広いテーマと思う。支援者が直面したり実感したりする支援の難しさをどう読み解くか。放課後等デイサービス事業も行っているので、小学生のケースで登校できない場合などもある。現在進行形で悩んでいるケースはある。対応していく中で劇的に変化したケースもあった。

委員長：登園しぶりの背景や保護者をどう支えていくか、など色々な視点で考えられると良い。ただ登園しぶりが解消すれば良い、ということだけではない。トータルで捉えていく視点が大事だと思う。

委　員：登園しぶりのほとんどは発達の過程で生じている現象ととらえているが、中には深刻なケースもある。登園しぶりだけでなく、家庭的な背景もあって、保護者への支援をしていくことが重要な場合もある。保護者の理解を得ることに難しさを感じることもある。様々な機関と連携をとりながら支援を進めていくことが必要なので、ネットワークの中で総合的に支援していきたいと考えている。

委員長：今年度は登園しぶりをテーマとしながら、事例の検討をしてもらいたい。

（2）　来年度の取り組みについて

事務局より資料２にそって報告した。

＜質疑応答＞

委　員：宇治市の就学前のフォローシステムについての研修は、具体的にはどのような内容になるのか。

事務局：例年、年度 1 回目の会議でご報告している就学前のフォローシステムの中でも、特に保健推進課で実施している事業について広く知っていただきたいと考えている。

委　員：それは例年されている研修なのか。

事務局：これまでは実施していない。一部の園からの依頼を受けてフォローシステムをご説明したことはある。

委　員：ぜひ継続して取り組んでいただけたらと思う。児童発達支援事業所としても、市の支援の仕組みを共有させてもらえるとありがたい。

委員長：研修の形態はさまざまにあり得ると思うが、どういった形態が望ましいか、ご意見があれば出していただきたい。

委　員：現場の支援員がどこかに出向いて研修に参加することが難しい状況もあり、出前で事業所に来ていただけると参加しやすいと思う。そういったことは可能かどうか。

事務局：出前となると色々な施設や園へ行かせていただくことが必要になるので実現は厳しい。その場合は、ズーム等を使用して、他の施設と合同での開催になると考える。

委員長：ズームであれば、講師が話した後にブレイクアウトルームにて少人数で意見交流することも可能である。

委員長：研修の内容について、ご意見があれば出していただきたい。

委　員：現場の職員も役割分担や経験年数が様々なので、層に分かれた研修の設定があると良いのではないか。職員は、対象のお子さんをどう捉えたら良いのか悩みながらかかわっている。子どもの行動の背景にあるものをどう捉えるか、経験年数が長い職員は色んな視点を提供できる。対象となる子どものタイプも幅が広いと抽象的になってしまうので、年齢などテーマを絞って設定してもらえると良いのではないか。例えば、2 歳前後の自我が爆発していく時期や 4 歳前後に特性によって困り感が増大しやすい時期などについてお話を聞きたい。もう 1 点、保護者支援を担当している立場では、核家族で育ってきてコミュニケーションが苦手な保護者、子どもとどう遊んでいいかわからないという保護者、など保護者への支援についても悩むことが多い。

委員長：経験年数は年齢ではなくその現場でのキャリアがどうか、という視点で良いと思う。保育士の世界では、若手・中堅・主任、という表現が使われているようだ。転職されてきた方などは、若手の層に参加しにくい、ということがあるかも知れないので、表現は検討した方がよい。ただ、同じような問題意識がある方たちを対象にテーマを考えていくことは重要だろう。発達という点でも、乳

幼児期に躓きやすい時期というのがいくつかあると思う。例に挙げていただいた、2 歳や 4 歳のころはどの子にも共通して大事な年齢ととらえている。

委　員：こども発達支援センターでは、近年、年長児の併行通園のグループを実施している。保護者とともにお子さんの課題を見極めつつ、お子さんがより過ごしやすい就学先を保護者とともに考えていく。加えて、保護者の希望があれば小学校 1 年生の期間、年長時に担当していた職員が学校訪問を行うという、2 年間支援する内容となっている。過去 3 年の取り組みの中で、お子さんにとって合っていると思われる環境を選ばれた方は半数に満たない。その結果、小学校でもしんどい、という状況を見ている。そのため、就学に関連した研修として、就学先の選択肢に支援学校や地域の学校の支援学級があること、それぞれで実際にどのような教育が行われていのか、メリットデメリットなど、直接、学校の先生からお話を聞ける研修や、そういう場があっても良いのではないか。

委員長：今のお話を聞いていただく対象は、保育園や幼稚園など園の先生で良いか。

委　員：まずは園の先生に知っていただくことが必要だ。

委員長：就学先について園の先生方もなんとなくはご存知だが、進路に悩む保護者に対応する際、具体的な地域の実情も含めて園の先生がご存知でないとお話ししていくことが難しいのだろうと思う。保健推進課で企画される研修の中に、就学先についての研修も入れていただけると良い。

委　員：教育委員会としても、保護者と日々かかわっておられる園の先生方に就学支援委員会の取り組みを知っていただくということであれば、先ほどの研修の中でお話していくことはできると思う。

委員長：就学前のフォローシステム、というテーマの中に、就学の後の見通しも含めてもらえると良いのではないか。

委　員：京都府保育協会の研修計画の中にも、小学校との接続というテーマの研修があった。

（3）　その他

委員長：その他、何か話し合いたいテーマがあれば出していただきたい。

委員長：今日の会議では、それぞれの現場で専門性を高めていくための研修についてご検討いただいた。前回の会議でも委員からご意見もあり、以前からご指摘いただいていた内容だが、そもそも人の確保が難しいというお話があった。現場では切実な実態があると思う。いかに人を採用するための工夫をするか、採用できたとしても、その方にどのように定着してもらうか、という 2 点に課題がある。それぞれの事業所で苦労されているところ、工夫されているところをお聞きしたい。また、せっかくネットワーク会議にご出席いただいているので、今後会議として取り組めることがあればご希望なども出していただいて今後

の検討課題としたい。

委　員：福祉人材の確保はとても難しい状況で、福祉の就職も早まってきている印象である。福祉フェアなどに出ていくことが必要である。さらに、オンライン資料や動画を作成するなどして、学生に知ってもらうためのツールや人手を準備し、機会を作っていくようにしている。学生たちは学校に通っているので、土日に動くことになり、勤務の調整が難しい。一番思うのは、児童発達て何ですか、と言われる学生が大変多いことだ。興味を持ってもらえれば、面白くてのめりこめる職業ではあると思うが、児童発達を知ってもらうための窓口の作り方が難しいと感じている。保護者も、児童発達＝うちの子障害があるのかな、と思われるなどとても敷居を高く感じておられる。通われた保護者は、もっと早くに来たら良かった、と言われる。保護者にも学生にも、わかりやすいアピールとは何かを考えながら福祉フェアに出ている。福祉フェアに来ている保育に興味のある学生の中で、児童発達に合いそうな方に声をかけて実習に来てもらったりしている。実習のパイプもあるとうれしい。

委員長：福祉フェアは何時間もあるので、ブースに人が立っている体制を作るだけでも大変と思う。今の学生の就職活動はほぼインターネットの世界で行われている。ホームページが充実していて動画が作られているところに行きやすい傾向があるようだ。単独の事業所でできることには限界があるのではないか。宇治市として取り組めることはないのか。例えば、児童発達というものに出会えていない若い方たちに、集団的にアピールできる方法はないものか。

委　員：福祉フェアはとてもありがたく、多いときは年に数回出させてもらっている。そのおかげで専任の職員は確保できているが、パート職員の確保が難しい。ハローワーク等にも求人情報は出しているがなかなか見つからない。児童発達は早い時間の勤務なのでまだ人が確保しやすいが、放課後デイは夕方の勤務なので確保が難しい。また、若手職員が増えてきている中で、定着の難しさも課題となっている。

委員長：事業所内だけでなく、他の事業所で働く同じような立場の人と話すことで、改めて自分の事業所のことが見えてたりやりがいを持てたりすることもある。そういった横のつながりを作っていくためにネットワーク会議の研修が拠点となれば良いのではないか。

＜閉会＞

事務局：11 月末で第 11 期が終了となるので、手続き関係でご協力をお願いしたい。